
白の階段と破片

ロースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の階段と破片

【Zコード】

N1761M

【作者名】

ロースト

【あらすじ】

天使製造計画！嘘ですごめんなさい。

予想：実験サンプルたちの成れの果てです。

白の階段と破片

カツン カツン
もうどのくらいだろう
かしら

僕は階段を上つて
ているの

白くて白くて

まわりは白ばっかり。

他の色なんて何もない。
もない。

在るのは階段と僕

カツン カツン

甲高い音が鳴る。

ゆっくり、ゆっくり上つてく
くり上つてくの

何のために。

もう忘れた。

いや、元々ないのかも。
いのかも。

どのくらいだらう

僕は階段を上つて
いる。

どのくらいかしら
私は階段を上つ

カツン カツン
もうどのくらい
私は階段を上つ
ているの

白くて白くて

まわりは白ばっ
かり。

他の色なんて何
もない。

在るのは階段と私

カツン カツン

甲高い音が鳴る。

ゆっくり、ゆつ
くつくり、ゆつ

何のために。
もう忘れたわ。

いいえ、元々な
いのかも。

ている。

何分、何時間、何日？

何日？

それ以上かもしれない。
れないわ。

時間間隔がない。

時が経つていてるようで、

経っていないうにも感じる。

うにも感じる。

ついでに飢えも疲労もない。

疲労もない。

階段は白、壁は白
でも、本当に壁なんてあるのかな。

なんてあるのかしら。

在るのかないのかわからぬ。

かわからぬわ。

階段は白、壁は白
でも、本当に壁

在るのかないの

在るのかないの

カツン カツン
本当に在るのかな。

ら。

僕は本当に在るのかな
るのかしら

カツン カツン
本当に在るのかし

私は本当に在

カツン カツン
見えるのは白

階段も白、壁も白、そして僕も

カツン カツン
見えるのは白

階段も白、壁

も白、そして私も

どのくらいだらう

どのくらいの時間が経ったのだろう。

が経ったのかしら。

僕はいつからこうしていたんだろう。

していたのかしら。

カツン カツン

どのくらいだらう

気付いたときにはもう上っていた。

もう上っていたの。

何をするでもなく、

こつやつてずっと、

ずっと

階段を上っていた。

たの。

先には何があるのだろう。

かしら。

なぜ僕は上のだろう。

かしら。

僕を突き動かすのは何だろう。

は何かしら。

この先には何があるのだろう。

るのかしら。

カツン カツン

どのくらいかしら

どのくらいの時間

私はいつからこう

していたのかしら。

カツン カツン

どのくらいかしら

気付いたときには

何をするでもなく、

こつやつてずっと、

いつまでこんなところを続けるのか

いつまでこんなに

一生にこから出られないのか

れないの

でも何故か、本心で、強く、

て
強

心の底から、ここを出たいと、

を出だし

見方圖

ひときわ眩しい白が
ひときわ眩しい白が
階段の先に現れる

階段の先に現れる

でも、僕は焦らない

八九二十八

へ辯じへひあむじへひ

ヘジコヘリアコヘリ

歩く道へ

心は好奇心と不安でいっぱいだった。

心地無いが歩みはゆくへつ。

心は焦るが歩みはゆっくり。

階段を上つさうたところには

階段を上りきつたところには

中途半端に開いた扉

中途半端に開いた扉

眩い光が差し込んで

眩い光が差し込んで

眼が眩むのと緊張が最高点に着てると

眼が眩むのと緊張が最高点に着てると

心臓がドキドキバクバク

心臓がドキドキバクバク

高鳴りはひどくなる一方

高鳴りはひどくなる一方

手を伸ばす。ゆっくりゆっくり。

手を伸ばす。ゆっくりゆっくり。

どくどくと血が流れてるのがわかる

どくどくと血が流れてるのがわかる

それでいて、第三者のように考える自分

それでいて、第三者のように考える自分

知つてゐる。この先にあるのを知つてゐる。

知つてゐる。この先にあるのを知つてゐる。

ああ、この後にあるのは

ああ、この後にあるのは

扉を開いた先にあつたのは

扉を開いた先にあつたのは

光と鏡。そして自分の姿。

光と鏡。そして自分の姿。

でも、鏡に映る僕は僕じゃない。

でも、鏡に映る私は私じゃない。

ガラス張りの部屋の中心

ガラス張りの部屋の中心

鏡に手を伸ばす

触れたその鏡は、不思議な感覚で

触れたその鏡は、不思議な感覚で

自分の現在の姿を見る

在の姿を見る

自分の目で確かめる

自分で確かめる

自分の

なんだ、僕死ぬのか。
んだ。

僕の左半身は何処にもない
処にもない

此処にあがつて来るまで

此処にあがつて来るまで
生きてられたのが不思議。

が不思議。

だつて、左は全部ないんだ。
部ないのよ。

どうやって歩いてきたんだつけ。
てきたのかしぃ。

鏡に映つた姿は僕じゃない。

鏡に映

つた姿は私じゃない。

この鏡の向こう側にいる彼女

の向こう側にいる彼方

彼女は右半分がない。

方は左半分がない。

だって、僕と彼女は一緒だから。

方は一緒にから。

僕と彼女で一つの作品。

でひとつ的作品。

自分ひとりでは失敗作

りでは失敗作

それに気付いたからやつぱり

からやつぱり

僕らは失敗作。がらくた。

がらくた。

自分ひと

それに気付いた

私たち失敗作。

もうちよつとで完成だったのにな。

もうちよつとで
もうちよつとで

もうちよつとで
もうちよつとで

もうちよつとで
もうちよつとで

一つになれたのに。

また失敗か。後どのくらいあるんだろう

どのくらいあるんだろう

あとどのくらいで彼女に届くのだろう

で彼方に届くのだろう

この鏡

彼

だって、私と彼

私と彼方

私と彼女

ああ、一つになりたい。

りたい。

彼女と、一つになりたい。

なりたい。

いつになつたら、完全になれる?
完全になれる?

いつになつたら、
彼方と、一つに

ああ、一つにな
りたい。

僕たちは一人で一つ。

一つ。

それぞれが、自分の意思で

分の意思で

一つに、完全になることを

なることを

心から望んでいる。

る。

また失敗か。もう次は無いぞ。コレで終わりだ。

この実験も、コレで潰えたのね。ようやく肩の荷が下りたわ。
そもそも、こんなイカレタ実験、もうとっくに、意味の無い
ものなのに。だって、製作者はすでに……

そんな声が、どこかで聞こえた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1761m/>

白の階段と破片

2010年10月11日08時42分発行